



Title	それにしても
Author(s)	今枝, 信雄
Citation	makoto. 1977, 20, p. 12-12
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86168
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

それにしても

日本万国博覧会記念協会

理事長

今

枝 信 雄

昭和二十二年、夏の盛りのことでした。

青森駅に着いた上野発夜行列車から、煤に汚れた乗客の列が青函連絡船の棧橋へ続いていました。

ところが、乗船を前にして、乗客は異様な経験をする事になったのです。医者が身に着けるような白衣を着た数人の人が手持ちの大型噴霧器で乗客の一人ひとりに、頭から白い粉を噴きかけ、その上、背筋と胸元に噴霧器を差し込んで、白い粉を噴き込んでいたのです。

そして、白い粉の洗礼を受けた乗客は、手の甲に青いスタンプを押印してもらい、それを乗船切府のように係員に呈示して乗船して行くのです。その場には、占領軍の兵士が監視するような恰好で立ち合っていました。当時、かなり広く流行していた発疹チフスに対する処置だと聞かされましたが、DDTとい

うものがこんなふうに使われていたのを初めて体験しました。

大阪防疫協会が昭和二十二年に設立されたとき、すぐに青函連絡船でのこんな体験を思い出しました。

それから三十年、思えば世の中はまるきり変ってしまったようです。公衆衛生、環境衛生、防疫といった方面では、別世界になったかのように思われます。もちろん、自然にそうなったというわけではなく、大阪防疫協会が三十年にわたって積み重ねて来られたような努力が各方面で続けられて来た結果だと思えます。

私が子供のころには「避病院」とか「隔離病舎」という言葉は、そのまま「死」そのものを連想させる恐ろしいものでしたが、今では、こんな言葉も死語か廃語になってしまったと思われるほど衛生状態が改善されたと信じ込んでいました。

ところが、今年の夏の和歌山県有田市のコレラ騒動にはびっくりさせられました。門外漢の私には、何が何やら、本当のところはわかりませんでした。これは油断できないぞという気持ちになったことは無理からぬことでしょう。

それにしても、防疫問題が地域住民の生活の根底そのものであることを見事に立証した事件ではありました。有田市は地域全体がコレラ菌に汚染されており、住民はまるでコレラ菌をまきちらす悪魔の使者でもあるかのように世間から見られてしまい、一時は、まったくの隔離状態、陸の孤島となつてしまい、数え切れないほどの悲喜劇が見られました。

こんな事態を招いたのは、マスコミのせいだという人もありますが、世間一般が伝染病などというものは、すでにこの世から絶滅してしまったと信じ込んでいたことの反動だったのではないのでしょうか。

ところが、現代技術の粋を集めて建てられたビルや華やかに見える盛り場でも、ネズミやゴキブリに悩まされていることは周知の事実ではありませんか。私たちが信じ切っているほど衛生状態が良くなっているかどうかは、やはり疑わしいというべきでしょう。また、仮りにそれほど良くなつていたとしても、今日ほど国際的な交流が盛んなれば、他の国の衛生状態について無関心ではおれないでしょう。

さきのコレラ騒動も、その原因が外来のものであることは、否定しきれないでしょう。そうだとすれば、「水際作戦」などと恰好のよいことをいって済ましておけるものではないでしょう。そこで、外国に出かける人たちは、特に団体旅行のメンバーには、出かける先の衛生状態について十分な情報を提供することを旅行代理店に義務づける必要があります。

海外に出かける人たちは、定められた予防接種や注射をすれば万事よしとするのではなく、その地域の衛生状態を十分に承知して、自らを守ることが第一

です。そんなことすら用意せず、用心できないで、自分はおろか他人にまで迷惑をかけるようなことでは、海外に出かける資格もなければ、帰ってくる資格もないというべきでしょう。現に、伝染病に罹かった人は、帰国に際しては隔離され、帰国の資格を認められないではありませんか。

海外旅行や国際交流に水をさすつもりは毛頭ありません。それどころか、もっと盛んになつてほしいと思うからこそ、もっとも初歩的であり、しかも大事だと思われることをいってみたいまでです。

それにしても、創立三十周年を迎えられた大阪防疫協会の仕事は、やはり大切なものだと思えます。仕事が地味で、華やかでないだけに、いっそう大切にしたいと思います。大阪防疫協会に対するお祝いの言葉が自然に出て来ることは気持の良いものですし、声を大にして励ましの言葉をかけて上げたいと思えて来るのも嬉しいことです。

